

「食」に関する女性の意識*

本田時雄 八田悦子

浜田厚子 吉野淳子

I はじめに

価値観の多様化が叫ばれて久しいが、日本人の食生活も戦後30年を経た今、大きく変貌してきた。家庭電化製品、インスタント食品などの利用による省力化、合理化が著しく進み、主婦の家事労働は軽減されたはずであるが、「国民生活時間調査」(NHK, 昭和45年)によれば少なくとも平日のそれは昭和35年より増加している。このような矛盾がどのようにして生れたのであろうか。ここではとりあえず、「食」を通して主婦の意識がどのようになっているかを、地域と世代を手がかりとして明らかにしようと試みた。

具体的には、調査対象の特性、インスタント食品を中心とする「食」、生きがいなどに関する調査を、東京と下関の3世代に行なった。

II 方法および手続き

1 調査票の作成

調査項目は、調査対象の特性を知るフェースシート部分(1)と「食」に関する意識・行動および生きがいを問う部分(2)とから成る。「食」では、前記の4段階における「手作り」と「既製品および外食」についての設問が設けられてあった。「生きがい」では生きがいの有無、生きがいの対象に関する設問があった。

2 調査方法

調査対象は、東京の私立女子高校2校と公立高校の女子生徒とその母親(ほぼ40代)および一般主婦、下関の公立高校の女子生徒とその母親(ほぼ40代)および一般主婦であった(表1)。

表1 調査対象

地域	群 年代	群 I	群 II	群 III
		10代(高校生)	20・30代	40～60代
東京		112	107	150
下関		148	50	66
計		160	157	216

* 本論文のデータは、八田、浜田、吉野「食意識の生活学的研究」実践女子大学、昭和51年度卒業論文による。

調査は昭和51年7月～9月に行なった。高校の場合、生徒に家へ持ち帰ってもらい、生徒とその母親に記入してもらった。一般主婦の場合は各家庭を回ってアンケートを頼み、一両日中に回収した。

III 結果および考察

1 調査対象の特徴

学歴は、全体として「旧高女、新高卒」が最も多く(68.9%)、次いで「旧高専・短大・大卒」(17.5%)、「旧小・新中卒」(13.6%)となっていた。東京、下関とも順位は全体と同じであったが、東京の方が2位、3位の割合が大であった。また両地域とも学歴の高い人がⅢ群よりⅡ群に多かった。

職業に関しては、半数以上が専業主婦で特に東京Ⅱ群は $\frac{3}{4}$ と多く、少ないのは下関Ⅱ群であった。常勤者は下関Ⅱ群が4割強と多く、東京Ⅱ群は1割強で、Ⅲ群は両地域とも約 $\frac{1}{4}$ であった。パートタイマーは両地域とも類似した傾向で、Ⅱ群は6%、Ⅲ群は10%強であった。有職の場合の職種をみると、管理職はどの群にもいない。下関Ⅱ群には自由業、専門、技術職、サービス職、事務系はなく、東京Ⅱ群は労務系がなかった。

夫は、東京Ⅱ群99.1%、Ⅲ群91.3%、下関Ⅱ群100%、Ⅲ群95.5%いた。また世帯主の職業は管理職、専門・技術職が多く、次いで事務系、商工業自営と続いていた。地域別では、東京が管理職、自由業、商工業自営に多く、その他の職種に少なかった。年代別では、両地域とも商工自営、自由業、管理職がⅢ群に多く、専門・技術職がⅡ群に多かった。

結婚経過年数は、平均がⅡ群約9年(1～21年)、Ⅲ群約22年(3～44年)で、地域差はみられなかった。

台所の広さは、「6～8畳」が最も多く、「4畳未満」、「4～6畳」、「8～10畳」が続いていた。東京ではⅡ群が「6～8畳」で半数以上と多く、それ以下と「10畳以上」にⅢ群が多かった。下関ではⅡ群が10畳以下で多く、「10～13畳」にⅢ群が多く、それ以上には両群とも皆無であった。また台所にダイニングを含むか否かについて

は、Ⅱ群は地域差が認められなかった（約78%が含む）が、Ⅲ群では東京（44%）より下関（62%）の方が含んでいると回答した者が多かった。

1ヶ月の食費に関しては、下関が14万円以上が皆無であり、地域差が明確にみられた。年代差はそれ程はつきりしていないが、Ⅱ群よりⅢ群の方が多かった。また生活費に関してもほぼ同様の傾向が認められた。

居住地域は、全ての群で住宅街が最多（約8割以上）

表2 本人の就業形態 (数字は上が実数、下が%)

	東 京			下 関		
	Ⅱ	Ⅲ	小計	Ⅱ	Ⅲ	小計
常 勤	9 12.0	25 22.9	34 18.5	18 40.9	17 28.3	35 33.7
パ ー ト タイマー	5 6.7	14 12.8	19 10.3	3 6.8	9 15.0	12 11.5
専 業 主 婦	57 76.0	64 58.7	121 65.8	23 52.3	33 55.0	56 53.8
そ の 他	4 5.3	6 5.5	10 5.4		1 1.7	1 1.0

表3 夫または世帯主の職業

	東 京			下 関		
	Ⅱ	Ⅲ	小計	Ⅱ	Ⅲ	小計
商 工 業 営 自 営	12 11.5	28 21.7	40 17.2		11 17.7	11 9.8
自 由 業	7 6.7	17 13.2	24 10.3	1 2.0	3 4.8	4 3.6
管 理 職	21 20.2	39 30.2	60 25.8	4 8.0	10 16.1	14 12.5
専 門 ・ 技 術 職	28 26.9	10 7.8	38 16.3	18 36.0	13 21.0	31 27.7
販 売 ・ サ ー ビ ス 系	14 13.5	1 0.8	15 6.4	1 2.0	5 8.1	6 6.1
事 務 系	15 14.4	17 13.2	32 13.7	12 24.0	14 22.6	26 23.2
労 務 系	4 3.8	12 9.3	16 6.9	11 22.0	3 4.8	14 12.5
そ の 他	3 2.9	5 3.9	8 3.4	3 6.0	3 4.8	6 5.4

で、それに下関Ⅱ群以外に商店街が、さらに東京Ⅲ群には工場街（1%強）が加わった。

2 食物および食事

a) 献立を立てる基準 (図1)

全体的傾向は「家族の好み」を先ず考える人が最も多く36.0%で、次いで「栄養」(31.3%)であった。最も少ないのは「手間暇のかからない」の6.2%であった。

両地域とも全体的傾向と類似した傾向を示していた。東京の3群を比較すると、「家族の好み」と「栄養」を考える人は年齢の増加にしたがって多くなり、「手間暇」を考える人は逆に年齢とともに減少していた。

下関Ⅰ群は、全群中、「値段」「家族の好み」が最少で、「得意なもの」が最多であった。また下関Ⅱ群は、6群中「栄養」を最も重視し、「手間暇」は皆無で最少であった。

b) 買う店

全体としては、「行きつけの店(スーパーも含む)」を選んだ人が多く(82.8%)、地域による差はほとんど認め

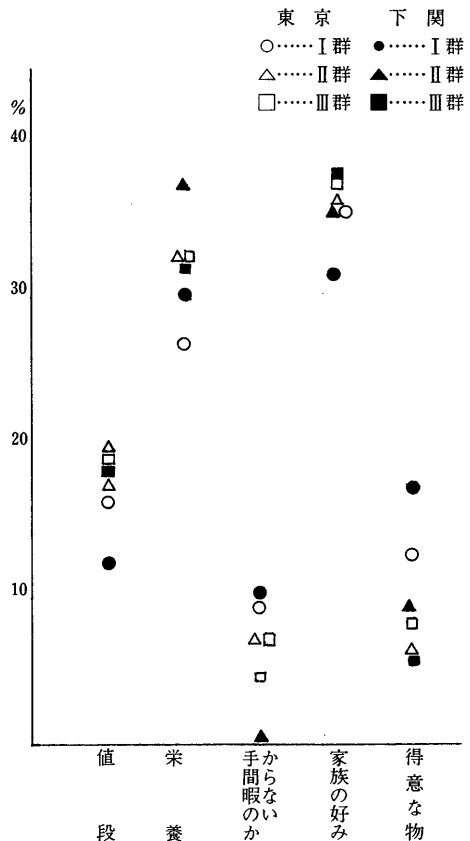


図1 献立を立てる基準

られなかった。年代を比較すると、「行きつけの店」を選ぶのはⅠ群に多く（東京90.7%、下関97.6%）、Ⅱ群が最も少なかった（東京76.2%、下関70.0%）。

c) カップラーメンとインスタントラーメン（1週間に関して）

カップラーメンを食べていた人は、東京の主婦、主人および子どもに多いが、その平均個数は下関の主婦（2.7個）と祖父母（4.5個）、東京の主人（1.3個）が他地域の対群よりも多く、子どもは両地域とも1.5個であった。

主婦に関しては、東京で食べる人がⅡ群に多いが、下関では年代差はみられなかった。地域差はⅡ、Ⅲ群とも東京の方が多いが、食べた平均個数は下関Ⅲ群（3.5個）が4群中最多であった。

子どもに関しては、両地域ともⅢ群が食べた者が多く、またⅡ、Ⅲ群とも東京の方が多かった。

インスタントラーメンを食べていた人は、全体として主婦約40%、主人約32%、子ども約60%、祖父母約15%で、子どもが最も多く、また主婦、主人、子どもおよび祖父母とも東京の方が多かった。食べた平均個数は子ども以外下関の方が多かった。

細かく見ると、食べている主婦は両地域ともⅡ群に、またⅡ、Ⅲ群とも東京が多かった。主人と子どもは、東京でⅢ群が、下関でⅡ群が、またⅡ、Ⅲ群とも東京が多かった。祖父母は両地域ともⅡ群が少なく、特に下関Ⅱ

群の場合皆無であった。Ⅱ、Ⅲ群とも東京の方が多かった。

カップラーメンやインスタントラーメンを食べる時間帯に関しては、4群とも半数以上が「昼食時」で、次いで「夕食後」（10%前後）であった。逆に少なかったのは「朝食」、「朝食と昼食の間」であった。年代差がみられたのは「昼食時」、「昼食と夕食の間」で、前者はⅡ群が、後者はⅢ群が多かった。

d) ①駅の立食うどん・そば・パンなど(図2-a)、
②マクドナルド・ロetteriaなどの利用(図2-b)

図2-a, bに示したように、地域差および年代差が明らかに見られた。すなわち駅の立食いは下関が、マクドナルドなどは東京が、それぞれ利用者が多く、またいずれの場合も年代が若い程利用率が高くなっている。

①と②についてのイメージを調べると、①については、下関Ⅱ、Ⅲ群が「便利」と考える人が40%前後で多く、(両地域のⅠ群は10%前後)、東京Ⅲ群とも「落ちつかない」と回答した人がほぼ35%で、下関Ⅲ群（15%前後）の2倍以上であった。②に関しては、下関Ⅰ群以外「便利」に多く回答し、また「楽しい」に東京Ⅰ、Ⅱ群、下関Ⅰ群が40%前後でその他の群（約15%）の2倍以上も回答していた。「落ちつかない」には東京Ⅱ、Ⅲ群が約15%、他の群が10%弱と回答していた。

以上の項目を正と負に分けてみると、図3のようにな

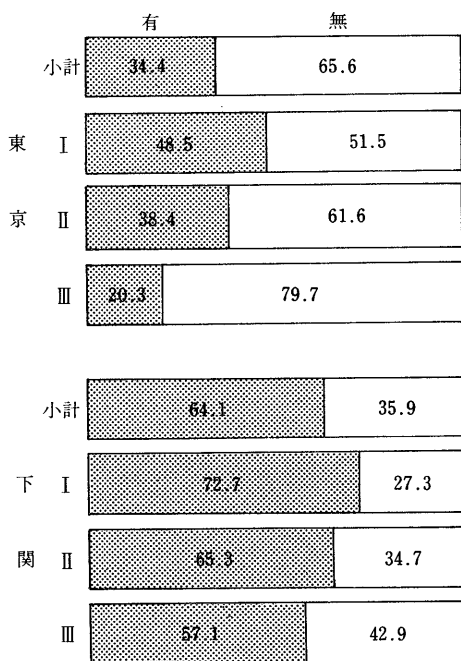


図2-a駅の立食うどん・そば・パンなどの利用の有無

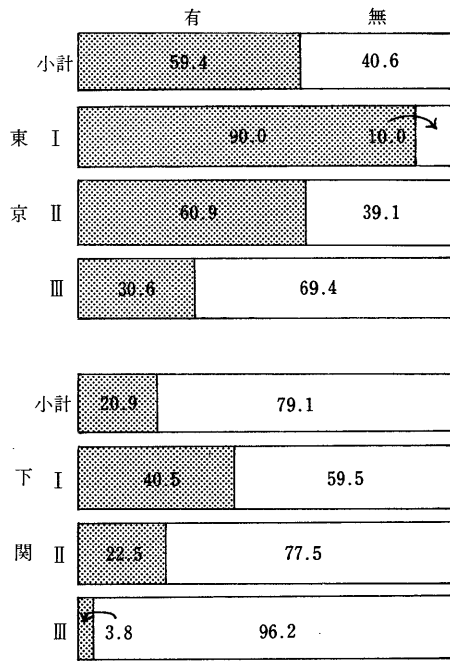


図2-bマクドナルドなどの利用の有無

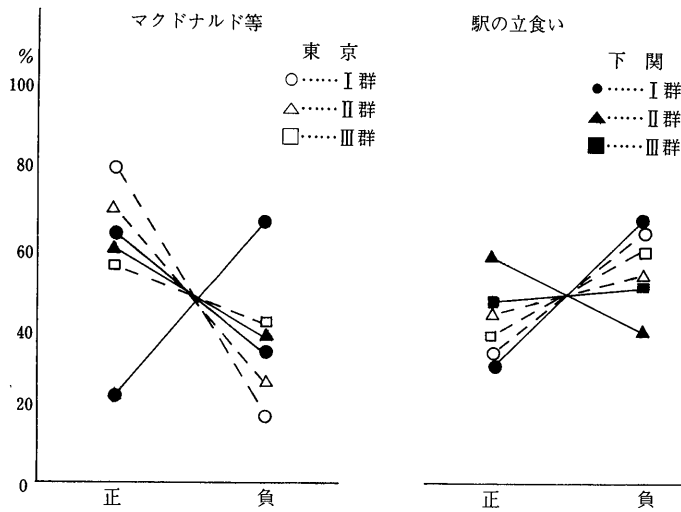


図3 マクドナルド等や駅の立食いのイメージ

り、マクドナルド等に関しては下関Ⅲ群以外、全ての群がかなり高い正のイメージを持っていたが、駅の立食いについては下関Ⅱ群以外負のイメージを抱いていた。

e) 手作り食品 (図4-a, b, c, d, e)

家庭で一般に作りやすいものとしては、①パン、②そば・うどん、③漬物、④梅干し、⑤マーマレードなどがあるが、それらを実際にどの位手作りしているかを調べた。

パンやそば・うどんなどの主食を手作りする人はきわめて少ないが、そこでの差異は地域差であり、東京の方が作る割合は大であった。

漬物は、即席漬けのような非常に簡単にできるものもあるためか、作る人が半数以上おり、かなり習慣化して

いると考えられる。「いつも作る」は年代差が、「時々作る」は地域差が認められた。すなわち前者はⅡ群よりⅢ群が、後者では東京の方が多く回答していた。

梅干しに関しては、下関Ⅲ群が漬物と類似した傾向を示し、東京Ⅱ群は逆の傾向を示していた。他の2群は類似した傾向を示し、「いつも作る」が「時々作る」より多く、習慣化しているものと考えられる。特に下関Ⅲ群が「いつも作る」で約95%と多く回答していた理由として、生梅の入手の容易さ、時間的ゆとりなどが考えられるが、やはり「習慣化」を主たるものとするのが妥当であろう。

マーマレードは、東京Ⅱ群が「時々作る」で約55%で最多であるが、他の3群は主食の場合と同様、「作らな

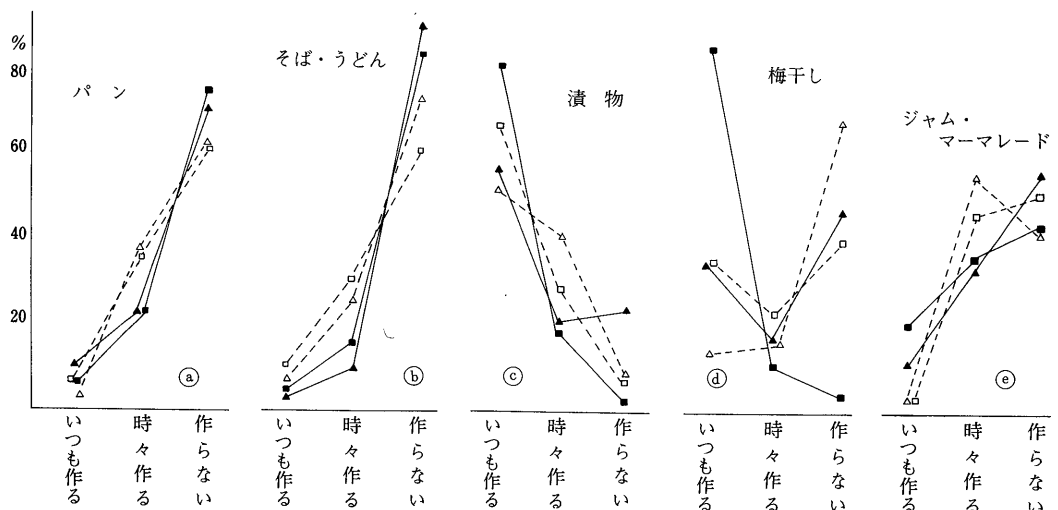


図4 手作り食品

い」で最多、「いつも作る」で最少であった。「いつも作る」では下関が、「時々作る」では東京が多かった。

f) 重視する食品の特性

食品については、味、簡便性、経済性、品質、栄養などが考えられるが、最近では太りすぎなどの傾向からかほとんど栄養は問題にされず、また品質も粗悪品がほとんど少なくなった故に重視する人は少なくなった。そこで、味、簡便性および経済性に関して、一対比較によって評定してもらったところ、1) 味、2) 経済性、3) 簡便性と評定した人が最も多く、全体としては73.7%でとび抜けて多かった。次いで多かったのは1) 味、2) 簡便性、3) 経済性(12.4%)、1) 経済性、2) 味、3) 簡便性(7.1%)で、他の順位の組合せは5%以下でしかなかった。すなわち、味重視が86.1%と圧倒的に多く、ずっとさがって経済性重視10.0%、簡便性重視 3.9%であった。

東京では年令が増すにしたがって味重視が増加し、逆に簡便性重視、経済性重視が少しずつ減少していた。これに対して下関では、味重視が高校生に最も多く、94.2%にもなっており、年令増加につれて、少しずつ減少し、Ⅲ群では80.0%であったが、逆に経済性重視や簡便性重視は年令増加とともに増加する傾向が見られた。

インスタント食品は、本来「簡便性」を考えて発売され、昭和34,5年の岩戸景気、所得倍増計画、既婚者特に40~45才の女性の雇用率の増加によって爆発的に広く利用されるようになった。しかし本調査では、8割以上の者が味を重視し、簡便性重視は最も少なかったが、これは本調査の対象者の多くが専業主婦だったためであろう。

既婚者の4群についてもう一度細かく見てみると、「手間のかからない市販品と、多少手間がかかっても値段の安いあるいは品質面で安心できる手作り」とを比較すると、東京Ⅱ群は「手作り」を選ぶ者が多かった。また他の設問(値段と品質)で「経済性」を選んだ者が多く、「生活費」や「買う店」の調査結果からもうかがえるように、経済的にあまり豊かでない。さらに専業主婦が76%と多いことなどから、手作りにするならば、手間をかけ、安くておいしいものを作ろうとする姿勢が認められる。

下関Ⅱ群は、値段と手間の設問において東京Ⅱ群について、手作りを選んだ者が多く(両地域のⅢ群との差が大きく、年代差有)、また手作りなら、「簡便性」よりも「味」を4群中最も重視し、さらに「経済性」よりも「品質」を東京Ⅲ群に次いで重視していた。ところが、「手間がかかる手作り」と「手間のかからない市販品」の選択では、「手作り」を選んだ者が4群中最少であった。この

群はパートタイマーの人が多く、また生活費から見ると経済的に比較的豊かで、既製品で済ませられるならなるべく手間のかからないように努めるが、自分で作らなければならない時は手間をかけても美味なものを作ろうとしているようであった。

東京Ⅲ群は、品質を値段よりも重んじる割合がとび抜けて高く、また味を値段よりも重視する割合も4群中最高であった。また「手間と値段」では高価でも手間のかからないものを選んでいった。すなわち、この群は生活費も高く、経済的に豊かで、味を重視するが、そのために手間をかけて手作りをしようと思うほどは調理に積極的な姿勢がみられない。これは、後述する「食事作りの意識」からも推測されよう。

下関Ⅲ群は、東京Ⅲ群が最多だった品質重視(値段より)において最少で、その差はⅡ群のものより大であった。また「味と値段」に関して経済性重視は最多で、逆に味重視は最少であった。

下関は関西の経済圏に近く、類似度が高いと考ええると、一般に云われてきた関西人のブランドよりも実質を重んじ、安い物を買うという傾向が、マスコミの発達によるローカルカラーの乏しくなった現在も、まだ高年層に残っていると考えられる。これは生活費が下関Ⅱ群よりも多かったことによっても間接的に裏づけられよう。

g) 食事を作る意識(図5)

この調査項目に対する回答は、4群間にあまり差異は認められなかった。全体として「主婦として当然の仕事」が最も多く、29.2%であった。次に「家族が喜ぶ」(16.7%)、「外食やてんや物よりも栄養的に良い」(16.1%)「外食やてんや物より経済的」(11.7%)「外食やてんや物より衛生的で安全」(9.5%)「作るのが楽しい」(9.4%)が続く、最少だったのは「自分の食事を作る時についてに家族の分も作る」で1%以下であった(図5参照)。

回答の9個の選択肢に対して、バラツキの最も大きかったのは「食事を作るのが楽しい」であった。最多は東京Ⅰ群(16.2%)、次いで下関Ⅰ群(11.2%)で、逆に最小なのは下関Ⅱ群(4.2%)であった。全ての群で最多だった「主婦として当然の仕事」において、両地域のⅠ群が他の4群と比して少ないのは、未だ主婦における食事作りの重みを実感できないためであろう。「家族が喜ぶ」に対して、下関Ⅱ群が1位、東京Ⅱ群が2位であったが、これは後述の「生きがい」の対象に関する回答と対応していた。

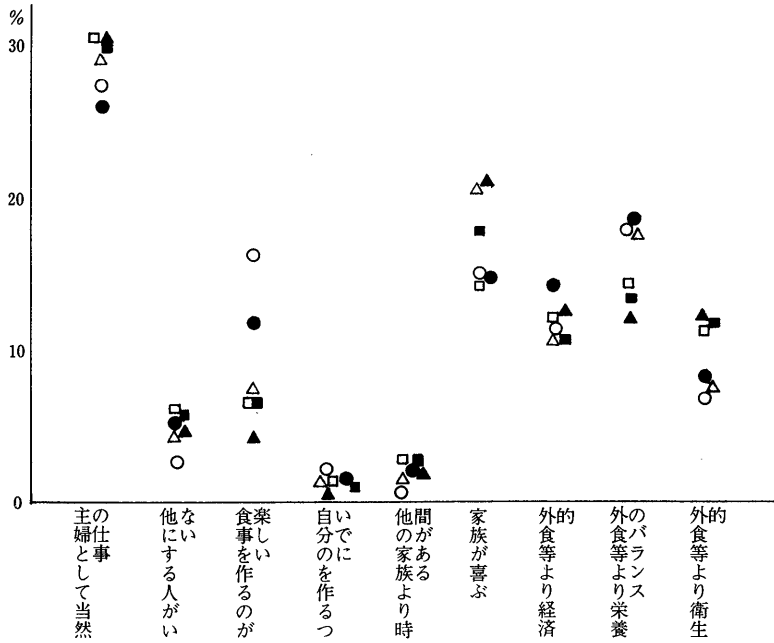


図5 食事を作る意識

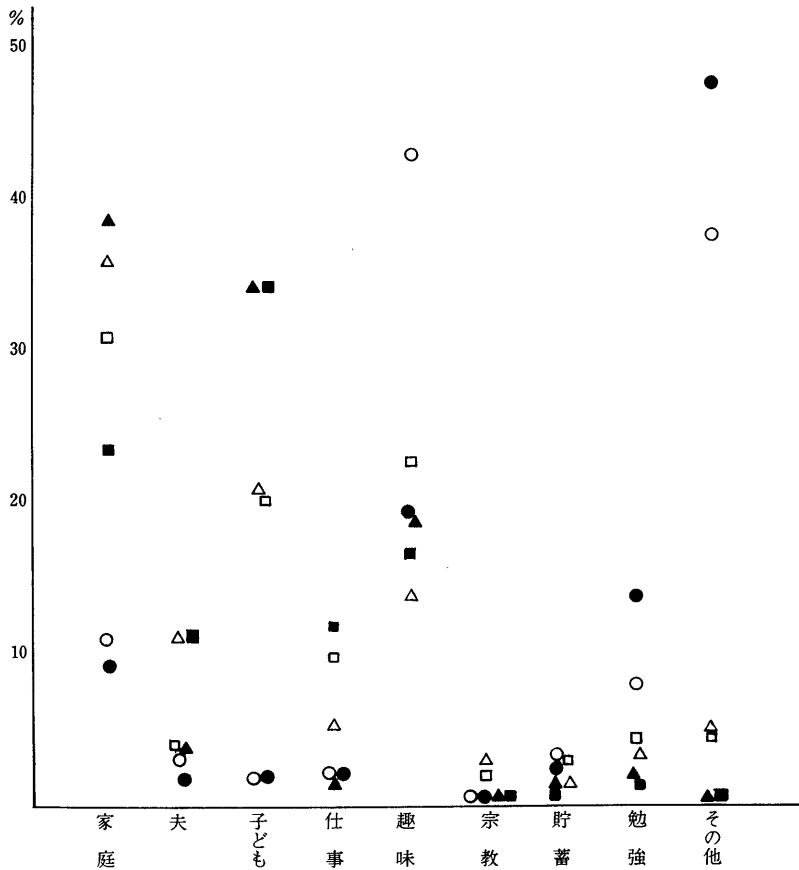


図6 生きがいの対象

3 生きがいと時間的ゆとり (図6)

両地域とも若いⅠ群が「持っている」と回答したパーセントが最も低かった(東京78%, 下関72.3%)。東京は年とるにしたがって、「持っている」とする人の割合が多くなるが、下関ではⅡ群が最多であった。

生きがいの対象別に見てみると、「家庭」は全般に高く、食事を作る意識で、「家族が喜ぶ」の多いことと対応する。また年代差が認められた。すなわち、Ⅱ群が最多で約40%、Ⅰ群が10%前後で最少であった。「趣味」で東京Ⅰ群が40%以上とび抜けて高く、また「その他」で下関Ⅰ群(50%弱)、東京Ⅰ群(30%弱)が高かった以外、他では全般的に低かった。「子ども」に関しては、Ⅰ群以外で地域差が認められ、下関の方(約35%)が東京(約20%)よりも多かった。子どもに対する愛着・関心は地方の方が強いらしい。

「宗教」「貯蓄」を生きがいとしている人はどの群でもきわめて少なかった。

時間に追われていると感じている人は、「やや」(37

.3%)、「非常に」(24.0%)「かなり」(21.7%)で、「感じない」人は2割にも満たなかった。「非常に感じる」では年代差が見られ、Ⅰ群は共に16%以下であった。「やや感じる」ではⅠ群が最も多く、共に5割以上で、次いでⅢ群、Ⅱ群の順であった。

「感じない」では下関Ⅱ群だけが4割近いのに対し、他の群は1~2割であった。

参考文献

- キッコーマン醤油KK広報部 食生活の意識と行動 1974・11~74・12 キッコーマン
- 今和次郎 生活学 1971 ドメス出版
- 中山誠記 食生活はどうなるか 1974 岩波書店
- 大塚滋 食の文化史 1975 中央公論社
- 日本生活学会編 生活学 第一冊 1945 ドメス出版
- 全国家庭科教育協会 小・中・高、児童生徒の食生活実態調査—小・中・高校別、地域別による考察 1975.3 全国家庭科教育協会